

	<h2 style="color: blue;">測られた死</h2> <p style="color: blue;">SCE・Net 小林浩之</p>	<p>E-73</p> <p>発行日 2011.00.00</p>
---	--	---------------------------------------

書きたいことは他にあったのだが、順序を変えて、母のことを書く。



・母の遺作

今も7月29日6時53分麻生飯塚病院北8病棟から電話が携帯の留守電に残っている。

ただ、電話の受信記録はあるが内容は、全く聞き取れないものであった。その時私はほとんど離陸寸前の機中にいた。その5時間30分後には母は逝ってしまうことになった。

最後はあっけなかった。白寿のお祝いをひ孫まで集まって30人ほどで祝ったのは1月19日のことであった。その席に歩いて参加した。少し、認知が出ているというのに、母は子供が感心するほどの答礼の挨拶をした。子供に娘が一人もいなくて、4人の息子しかいないというのが、最後まで口惜しかったに違いないが、それぞれの義理の娘（息子の嫁）に対して一人ひとり声を掛けるような挨拶をした。終了後は上機嫌で自宅で過ごし、翌日上機嫌で施設に戻ったのだ。“好事魔多し”。その夜、母は転倒し左大腿骨を骨折した。連絡を受けたのは翌日の朝である。骨折は98才となった母にはつらかったが、手術をしないという選択をせざるを得なかった。治らないことを意味するから、母の無念さ、取り返しのつかないことをしたという後悔は一方ならぬものであったと想像できる。ただ、再び歩けるようにはならなかったが、慣れることはできた。デイ・ステイ程度なら、車椅子での手伝があれば自宅に帰ることも可能となり、それを計画した。階段のある玄関まで車椅子を上げるためのスロープは施設長が木製のボードを加工して作ってくれていた。

しかし、4月ごろ、高くはないが時々原因不明の発熱をしたので、一時帰宅の機会は延び延びになっていた。飯塚には麻生太郎が地元のために貢献した数少ないものの一つと言われる、地方都市には珍しいくらい評価の高い麻生飯塚病院という病院がある。そこでも明確な診断も治療の指示もなされないまま、様子を見る状態が続いた。ゴールデンウィークの直前に、右足に褥瘡のようなものを発症した。連休があけて、皮膚科の開業医に通って治療を続けたが、高齢者には珍しくない血流不全による壊疽の状態が進行していると、事態が深刻なことをその皮膚科医が告げたのは、5月も20日を過ぎた時であった。翌週早速、麻生飯塚病院の形成外科を受診する。その頃は既に虚血性の疼痛がつかったに違いないが、痛みを止める貼り薬をもらえないかと元気に医者に話しかける母をみて、何とかしてあげたいと医者は言った。母の時計もこのときは右回りの確かな回転であったと思う。し

かし、若い人ならできる荒療治もこの高齢の母には適用できないことは明らかで、様子を見ることに賭けるしかなかった。それでもこの時は発熱があったわけでもない。6月1日に短時間の帰宅を行うことで予定はフィックスした。

しかし、ものごとはドラマのように進行する。2日後、今度は高熱を発し再度、形成外科と総合診療科を受診する。それでも目立った異常はないのか、投薬する薬の処方を変えて、様子を見るという程度の診断であった。5月30日のことである。1日様子をみても、薬効は認められず、6月1日（日）に救急外来からの入院となる。その時救急センターの若い担当医は、不躰とも言えるがいきなり、「ここでやる治療は投薬と点滴と酸素だけですけどいいですね」と言った。こちらにはそのような状況だという覚悟もなかったが、若い医師にはそのような予見もあり、想定も明確であったろうと思う。それでも、総合診療科の主治医は内科的には異常がないと言い、形成外科は壊疽の部分からは発熱はないと言い、所見が一致したのは、6月4日になってからで、可能性としては聞いていたが、突然、壊疽状態にあった左足薬指を切断し、更に足裏を切開し化膿部分を摘出した。そのような処置をしたと報告を受けたのは事後であった。これによって、発熱は治まり、抗生物質の効きも認められるようにはなった。しかし、同時に、母はこの重要性を認識して覚悟を決めたに違いない。その認識とは、もう治ることはないということであり、足の裏を床につけることさえできず、自らはトイレすら使えないということであった。

一度、踏み外すと転げ落ちるしかない。これまでの過程で、たとえばタイミング、初期の診断、初期の治療など、いくつかの医療上の瑕疵はあったに違いないが、小さなことでも、大抵のことは全く取り返しのきかないことになるということである。加齢とはこういうことなのだと感じる。

母は、自分が自覚していた人間として尊厳の限界を超えたと感じたに違いない。食べることを明確に拒否し始めたのはこの瞬間からであった。そして、この意志を翻すことはなかった。それでも、医者は一度退院させた。理由は良くなったかどうかは関係もなく手を尽くしたということである。退院し、施設に戻ったのは、6月27日のことである。その時のケアプランは、施設の人たちと会話や食事を一緒にすること。おむつの中でなくトイレを使って、自分で用を足すこと。の二つが含まれていた。それは退院前に本人の希望をケアマネージャーが聞いた結果のプランでもあった。

しかし、戻ってきた翌日には私も施設に呼びだされ、施設の嘱託医も駆けつけることになる。食事もとれず、水もとらない。点滴の用意すら間にあわなかったので、他の患者さんの薬液を借りることになる。その一週後の夜にはせん妄ということで飲食中にまた呼び出される。その翌日には、再度、飯塚病院の診察を受け、この時も、その場で再入院が決まった。

在院中は、医師たちは無駄を知らながらも最善を尽くしてくれたと言えなくはない。ただ、坂道を降りるように体力を消耗しながら、それでも液状の食事でも、母は歯を食いしばって拒んだ。これが選び、そして測り始めた母の意志なのだ。“まごころ診療”をモ

ットーとする病院としては非情に過ぎるのだが、入院した瞬間から、療養型病院への転院を勧めるというよりは強要した。熱心である。私たちは、紹介されたそのような病院をあたっていった。医療政策や病院の方針の要請ではあっても、衰弱ぶりから言って、そこまで体力はもつはずがないとは思いつつも、病院との話は進めてはいた。

死の三日前の26日、私の長男が見舞いに行った。もう俄かには誰か判別をつけがたい状況ではあったが、気が付いたとき出た言葉は「間にあったね」という言葉であったという。母は時間を測っていたのである。母は時間を測りながら逝ってしまったという気がする。

私自身は母と交わした内容にはほとんど覚えがない。要は特別の会話もかわすことなく25日にいったん横浜に戻って、28日の所用を済まして、家に戻った夜である。病院から電話があった。呼吸が苦しくなったという報告に近い連絡ではあったが、すぐにと話でもないと受け取ったが、同時に覚悟していたよりは突然とは感じた。一通り兄弟に連絡をして、私自身は明日の一番のフライトに乗る準備をし、夜が明けると羽田に急いだ。冒頭の病院からの電話は呼び出しであったのだ。飛行機を降りて状況を確認して、いったん家に寄って母が自ら準備をしていた死に装束を持って、病院に駆けつける。医者の弟夫妻が病室にいた。下顎で呼吸をするという末期の状態と言う。意識はほとんどない。声を掛けたら、かすかに目を開ける程度であった。もう少し大丈夫だから、順番に昼食をとろうという話になった。私が最初にと離れたが、食事の前に、お金の準備も必要だと思って銀行に寄っていた時、弟から電話があつて戻ってこいと言う。戻ったとき既にこと切れていた。心臓はまだ動いていたという、それも止まる。29日12時30分であった。

私にとっては少しあっけなかつたし、悔いが残った。事実5日前、声を掛け、別れるときには衰弱していることはわかったが、何よりも思考も感情もしっかりしていて、二度と言葉が交わせなくなる程とは思ってはいなかつた。最後までそばについているべきであった。

亡くなった後、床の中で母は食べることを拒否する以外に、積極的な意思を示さなかつたことが、気になった。母はどのような気持ちで逝ったのであろう。医師は死亡診断書に“老衰”と記入したが、老衰とはそういうことだろうか？満足という意志あるいは、不満足という意志をそのような形で閉じたのであろうか。もっとも思い当たるのは、覚悟を決めて自分の生命の時間を測り始めた時、すべての人事から解脱できたのではないかと言うことである。子供に対してすら、死に向った時、慌ても、焦りも、狼狽もみせることはなかつた。年齢がそうさせるものではなく、彼女の意志がそうさせたと思いたい。私の息子に向って“間にあったね”と口にしたのが、彼女にとって意志と感情の最後の表現であったように思う。

ポータブルトイレを使いたい。昔から一緒にいる人たちと再び話したい。という最後の願いも叶わなかつた。

思い出はいくつもある。

高校時代、私が、その生徒会長に任命されたことがある。今もそうだが、敢えて旧さを守っていた高校で、昭和 34 年のころで、選挙でなく、いわば、官選で、先生がクラスの級長の中から、生徒会長を指名したのである。母が猛烈に反発した。“受験勉強にさしつかえる”ということであった。受験勉強にさしつかえるかどうかはともかく、もともと立候補したわけでもなく、もっぱら運動会などの先頭に立つくらいが活躍という生徒会活動に興味もなかったのも、母にまかせた。学校に背いたということであろう、一身上の理由で解任ということになり、生徒会執行部は一名欠員のままとなった。これは、意を尽くして頼まれたことを断ったという意味で、私にとって、おそらく生涯続くトラウマとなる。

そして、受験の時には、東京まで行くな、理工系に進むことはない、母は主張した。理工系なら地元の国立大学で十分だというのが理由で、もっともな理由であったが、このときは私の意志を通して、東京の理系に進んだ。ちなみに、NHKの靱井勝人は私とは同世代、同郷で当時の中炭鉱主の子息と聞くが、彼は地元の大学の事務系に進学した。そのような時代である。

それ以降は母と一緒に住むことはなかった。しかしながら、私のお見合いの相手には、実らなかったが、母の母校の後輩と言うのも一人か二人はいた。若いときは、意志が明確な、理に強い母親でもあったと思う。高校を卒業し離れて住むようになったら、その距離のずれは時間のずれにもなったし、それは気持のずれにもなる。

そんな母親が、一言も言わずに逝った。伝えることも、恨み言をいうことも、叱ることも、感謝することも言うこともなかった。独り飯塚に残されて、多分恨み言を言いたかったのを抑えて黙ったのであろうと思う。一言口にすれば、そうなることを知っていたに違いない。

恥ずかしながら、よく最後まで親の面倒を見て、尽くしたと人には言われる。それはあたっているともいえるが、そうとも思えない。やってあげられることは、もっともったあつたと思うし、かなり自分の論理で行動し、本当に母が望んだことはやれなかったに違いない。

親孝行をしたときには親はなしというが、これはどんなに尽くしてもそう感じる子供の気持ちだという気がする。この話も、お互い持っている時計やものさしが合わなかっただけではないか。測りの行き違いであろう。

母は自分で決めた“測り”で、命を刻んで逝ってしまったという気がする。天寿を全うしたというより、自ら刻み、積み上げていった大往生と言うほうがふさわしく感ずる。

合掌